繪畫と品性

大和の會友

はたしてこれが當を得て居るや否やは知ぬが僕の繪畫と品性とに對する所感を述べやう。一管の畫筆、單純なる數種の繪具を以て、ペンペラペンの一葉の紙面の上に、大自然を捕えやうとするのが繪畫の根本的目的である。他面より云はゞ、自然の表情エフエクトーを遺憾なく表すのが繪畫の大目的でなければならない。

然して自然には例へ外見に美、醜等、あらゆる表情がありともその根本に立ち入るときは皆一にて、神聖にして人の犯し得べからざるものである。例へば無風流なる人のために風景絶佳の所に、生新らしい石垣を築かれたと假定したるとき、その一時は醜い感じを表はしたとてタイムの力にて石崩れ苔生じたるときは依然美的要素を有して居るのであらう。さなくとも、新古を問はず如何なるものにても一度自然界に持ち出だされたるものは絶對的に自然を取り去ることが出來ぬものである。又繪畫は文章と等しく筆者の思想を發表する方便であるから、その筆者の人格、性質、心の狀態等をも殘りなく表はすものである。故に忠實に自然を描寫せんとするときには、吾れ先づ自然の人とならなければならない。

然るに自然は前記の如く神聖にして犯すべからざるものである。されば吾れ、自然の人とならんには必ず神聖の人とならなければならないのである。

自己が神聖にて、自然に對してこそはじめて自然の感じをも圓滿に描き出すことが出來るのである。

若し畫面に向ひて猶、心裡野心あり邪念あり、虛榮心あり、欲望を懷いて居るものが何うして、よく完全圓滿なる描寫が出來やうか、決して望み得べきことでないのである。故に何人を問はず、繪畫を描き自然を描かんと志す者は必ずや、少くとも畫面に對する間は凡て の邪念を放逐せなければ ならないのである。

かくの如くにして幾月間、幾年間、時々に畫面に對して自己の下劣なる、惡德を放棄したるときは、例へ吾人の如き者といへども何時かは高潔なる品性を有することが出來るに相違あるまい。

或は揑造の說と云ふ人もあらう。然し僕はこれによつて僕の時々に彩筆を執る唯一の慰安として居るのである。

（四三—十—五）

新刊紹介

◎寫生趣味　第一號　石川欽一郎氏主として執筆せらるゝ菊二倍四頁大の美術雜誌なり。臺灣に於てかゝる經營は困難の事なるべく、それにも拘はらず發行を企てられし紫瀾會諸氏の熱心と勇氣とに敬意を表し、將來の發展を祈る（一部五錢送料二錢臺北南小門街一丁目紫瀾會發行）